

火之神:火の神を祀る祠

琉球土着の信仰において、火之神は火を司る神様です。古代、火之神はすべての村の女性司祭にそれぞれの村にカマドを作るための火を与え、村のすべての世帯はそこから各家のカマドを照らす火を受け取るよう定めたとされています。火は家とそこに住む人々を守ると信じられており、今日でも多くの沖縄の家には台所に火之神を祀る小さな神棚があります。ここには、水の入った器、塩を盛った器、泡盛（沖縄の酒）、常緑樹の枝、お香が置かれます。今帰仁のような王室のカマドは、特別な地位と重要性を持っており、王室と王国全体を守るものでありと信じられていました。今帰仁王室の火之神は、重要な国事用の殿舎と並び、主郭の中に位置しています。今帰仁城の最後の住人は1665年に去りましたが、18世紀に火之神の祠が建立され、引き続き信仰の対象としての役割を果たしています。祠は、1980年代に発掘調査のために少し離れた場所に移動されました。